九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡県甘木市栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓 : 社会考古学的観点からの若干の検討

溝口, 孝司
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・基層構造講座

https://doi.org/10.15017/8587

出版情報：比較社会文化. 3, pp.53-62, 1997-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第3巻（1997）53～62頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.3 (1997), pp.53～62

福岡県甘木市栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓：社会考古学的観点からの若干の検討

Memory and ancestral image in prehistoric mortuary practices: a case of jar burial No. 6 at location D, the cemetery site of Kuriyama, Amagi City, Fukuoka Prefecture, Japan

溝口孝司*
Koji MIZOGUCHI

Keywords : Yayoi period, northern Kyushu, mortuary analysis, memory, social archaeology

Abstracts: This paper attempts to illustrate an example in which the memory and the image of particular ancestors (probably lineage headpersons) were mobilised in mortuary ritual in order to create a specific social message. The example is drawn from jar burial No. 6 at location D in the cemetery site of Kuriyama.

Jar burial No. 6 was located right next to jar burial No. 5 and on top of No. 8, both of which are regarded to be the burials of lineage headpersons or equivalents. It is inferred from typo-chronology of those jar coffins that temporal gap between the deposition of jar burials Nos. 5 and 8 and jar burial No. 6 would have been lengthy (possibly more than 100 years.). Evidences suggest that the deposition of jar burial No. 6 at the location was deliberate, and it further suggests that mortuary ritual which was condcted on the deposition of jar burial No. 6 would have intended to mobilise the memory and the image of the dead buried in jar coffins Nos. 5 and 8, deposited a long time before.

Given that the period when the deposition of jar burial no. 6 took place, the early late Yayoi period (c. 1st century AD), was a period of turmoil in northern Kyushu in which pre-existing inter-lineage ties were probably destroyed, the author contends that the mobilisation of ancestral memory and image in mortuary ritual would have been carried out in the hope of restoring/restructuring intra/inter-lineage ties and integration.

Ⅰ．はじめに

福岡県甘木市大字平塚字栗山に所在する栗山遺跡は，弥生時代前期末から後期前半（弥生Ⅰ期末—Ⅳ期）[1]にかけて営まれた，甕棺葬を主な埋葬法とする墓地遺跡である。遺跡は，略北東から南西へと流れ筑後川へと注ぐ小石原川と佐田川にはさまれた，一ツ木—小田台地と呼ばれる台地の南西先端部近くに立地し（松尾1994：3），明治年間に甕棺が発見されて以来，度重なる踏査と発掘調査の対象となっている（佐々木1982：4；篠原1996：87　参照）。

以下の小論が問題とする一基の甕棺墓，第6号甕棺墓が位置するD群墓域は，1992年から1993年にかけて行われた調査において，はじめて検出された墓域である（松尾1994）。栗山遺跡では，これにさきだつ1981年度発掘調査において検出されたA・B・Cの三つの墓群とあわせて（佐々木1982），これまでに計四群の墓群の存在が確認されている。しかし，大正14（1925）年発見のイモガイ製貝輪22個をともなう甕棺出土地，昭和37・39（1962・1964）年福岡県立朝倉高等学校史学部による，鉄戈をともなう甕棺1基を出した調査地は，A—D群墓域の所在地から北西約100mの地点であることから（松尾1994：7，Figure 2　参照），墓域は，A—D群墓域の所在地のみに限定されるもの

* 日本社会文化専攻・基層構造講座
Department of the Basic Structures of Human Societies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University, Fukuoka 810, Japan.

ではなく，小石原川によって解析された，西方に広がる低地へとなだらかに傾斜する台地縁辺部に，かなりの広域にわたり広がる可能性がある（溝口1995b：71）。

最も最近の調査は，1995年1月から3月にかけての，A・B両群の隣接地点の調査であり，両墓群の形成過程などに関連する，多くの貴重な知見がえられている（篠原1996）。このように，栗山遺跡では，小規模開発にともなう事前調査が主体とはいえ，研究史を踏まえた明確な問題意識に基づく緻密な調査が積み重ねられており，北部九州地方弥生時代墓地の研究に，ユニークかつ貴重な資料・情報を提供する遺跡としてその重要性を増し続けている（春成1984；田中・土肥1988；溝口1995b　参照）。

小論でその性格・意味に関する若干の検討・解釈をおこなうD群墓域第6号甕棺墓は，以下にその詳細をあきらかにするように，D群墓域がその墓域としての役目を終えてからかなりの年月を経た後に，かつての墓域の一角に，ただひとつぽつんと営まれた墓葬である（図2）。この墓葬を際立たせるものは，この事実以外，一見なにものも存在しないように見える。

ところで，筆者はこれまで，考古学的埋葬遺跡・遺構・関連遺物を，葬送儀礼という社会的行為の遺した物質的痕跡として理解する立場から，事例研究を推進してきた（Mizoguchi　1993；溝口1993a；1993b；1995a；1995b など参照）。ことに，筆者は，葬送儀礼は，死者を生者の境域から祖霊の境域へと送るというその社会的機能・目的を媒介として，死者の遺骸，死者にまつわる記憶・イメージ，また，死者とともに埋められる品々などを「象徴的諸資源（symbolic resources）」として動員しつつ特定の社会的メッセージを発信し，生ける者達のあいだに社会的／権威的諸関係を形成・表示・再確認する機会である，と認識し（Metcalf and Huntington 1991: chapter 6; Barrett 1988; Mizoguchi 1993），そのような認識に基づいて，墓葬の被葬者の社会的位置・ランクの静的復元（例えば　中園1991をこの種のアプローチの代表例として参照）ではなく，被葬者を一定の方式で埋葬することによって発信された社会的メッセージを読み解くことを，研究の一つの課題としてきた。

以上のような視点を通して見るとき，その営まれた時期と場所をのぞいて，副葬品ももたず，とりたててふれるべき特徴もないかに見える第6号甕棺墓は，われわれに興味深い問題をなげかけてくるように思われる。ここであらかじめふれるならば，それは，一定の時間を越えて受け継がれ，葬送儀礼において意図的に想起されたと考えられる「個別祖霊のイメージ・記憶」，また，そのような「想起」にこめられた社会的意味にかかわる問題である。

以下の小論では，なぜ，この第6号甕棺墓葬が，a）このようなタイミングで，b）このような場所に営まれたのか，について，上記のような観点から考察する。そのことを通じて，栗山遺跡D地点第6号甕棺墓をその物質的痕跡として遺した葬送儀礼と，それを通じて発信された社会的メッセージの内容・その社会的意味に光をあて，あわせて，この甕棺墓が営まれた時代の「うねり」の一端にもふれたいと思う。

II．栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓：その時間的・空間的位置付け

まず，栗山墓地全体，すなわちA—D群を構成する墓葬のなかにおける，栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓の時間的・空間的位置について，確認しておく必要がある。

II—1．時間的位置付け

栗山遺跡出土甕棺については，すでに佐々木氏，松尾氏によって，型式編年の作業がおこなわれている（佐々木1982：171—178；篠原1996：75—84）。これらの作業は栗山遺跡と周辺地域の甕棺の地域的特色と，その発現の様相・動態を明らかにするとともに，栗山墓地形成過程の分析のための基礎を作るという，大きな成果をあげた。しかし，筆者は，1）両氏がその作業において，ともに橋口氏による甕棺型式分類・編年の成果（橋口1979）に基本的に依拠していること（佐々木1982：171；篠原1996：75・81），2）むしろ，橋口氏分類を利用しつつ，橋口氏が設定した各型式の枠組みのなかで，微細な時間的変異を遺跡内において柔軟に検討することによって，各墓群形成過程の実態的分析が可能となること（溝口1995b），3）研究者間に広く共有されている橋口氏の体系は，他地域の様相，他文化要素と墓地形成過程のしめす様相との対比等を行うに際して，現時点でもっとも便利であること，以上三つの理由から，橋口氏編年を以下の論議における編年的準拠枠とする。なお，橋口氏編年がその基礎としつつ精密化をはかった森貞次郎氏編年（森1968）は，橋口氏編年とならび，甕棺型式の名称体系として現在も広く用いられている。この事実に基づき，以下，甕棺型式の記述においては橋口氏型式名／森氏型式名という形で並記する。

栗山遺跡D群墓域第6号甕棺（以後D6号甕棺と略称）の特徴は，すでに報告書中の記述につくされている（松尾1994：16）。筆者なりの視点を加味しつつ特徴を列挙するならば，以下のようになるだろう（図1）。すなわち，a）口縁部は，若干外湾しつつ（丸みをおびつつ）立ち上がるいわゆる「く」の字形口縁である。口縁部の器体内面への傾斜角度（内傾度）は大きい。口縁部内面はナデおさめられ，稜をなす。口唇部はヨコナデにより丸くナデおさめら

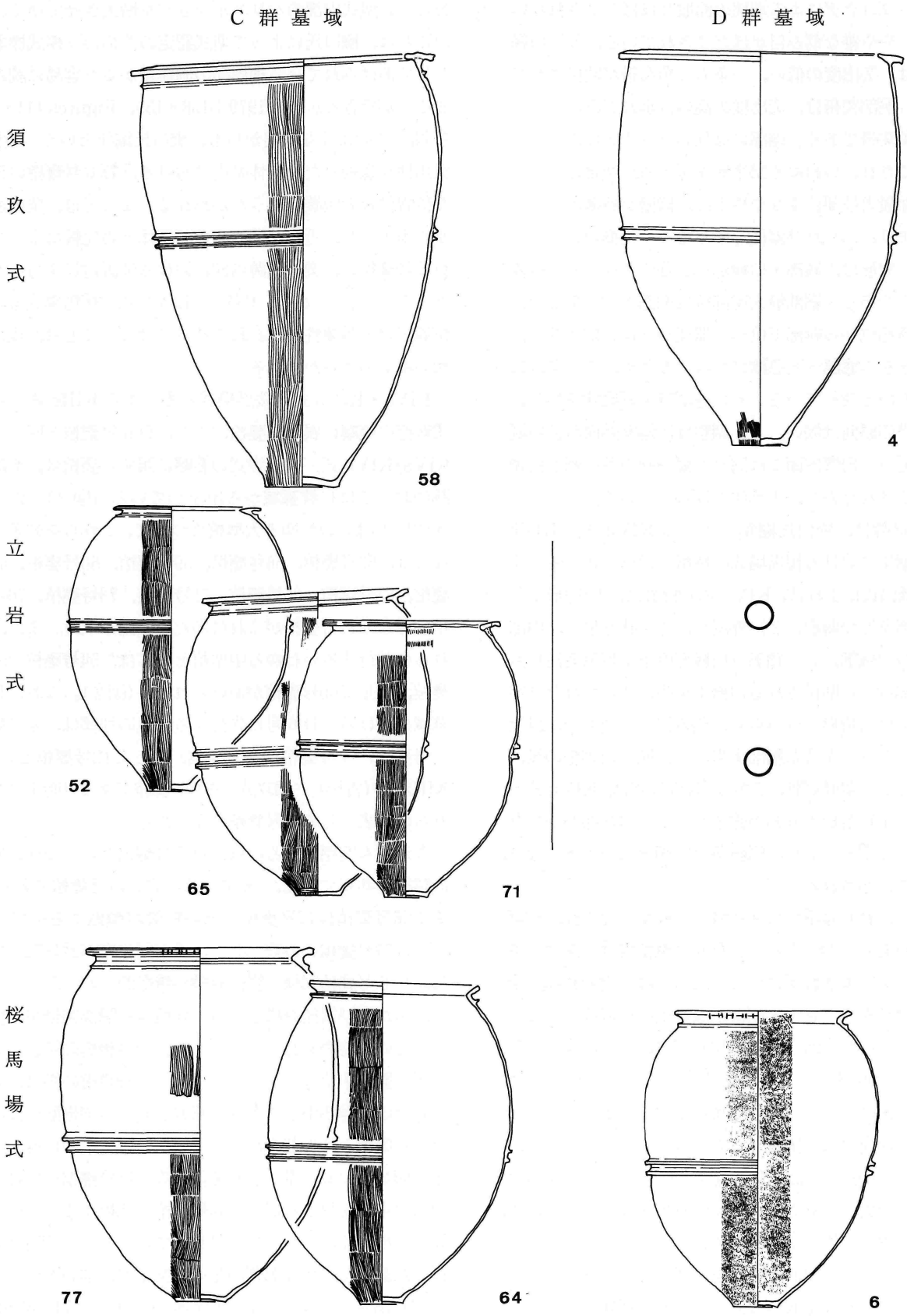

図1．栗山遺跡D群墓域第6号甕棺とその時間的位置付けのための資料．D群墓域4号甕棺と6号甕棺との間によこたわる橋口氏甕棺編年二―三型式にわたる空白に注意．(scale：1／16)（佐々木1982；松尾1994より抽出・再トレース，一部改変）

れており，ヨコナデによる端部の面取りはほどこされない。端部には，やや雑な刻み目がほどこされている。b）口縁部直下には，突出度の低い，一条の三角突帯が貼付されている。c）胴部突帯は，突出度の高い，垂れぎみの「コ」の字形二条突帯である。端部には強いヨコナデによる面取りがほどこされ，いわゆるM字形を呈する。突帯は，胴部中位，胴部最大径部位よりやや下の，器壁が特徴的にいったんすぼまり，ふたたび器径を増してゆく変換点に貼付される。d）器形は，底部・口縁部へと強くすぼまる，丸みの強いものである。胴部最大径部位は胴部上位にあるが，胴部最大径部位から胴部下位へと器径がさほど縮小せず，胴部突帯下から底部へと急激にすぼまるため，その丸みは際立ったものとなっている。e）底部は上げ底状を呈し，底部胴部界の屈曲は弱い。f）調整は，器壁外面が荒い縦方向の刷毛目，器壁内面には同じく縦方向の荒い刷毛目調整がほどこされたのち，ナデ仕上げられている。

以上の特徴は，橋口氏編年におけるKIVa式／KIVb式，森氏編年における桜馬場式の特徴とほぼ一致する。すなわち，橋口氏によれば，KIVa式の特徴は，1）卵形でしまった頸部をもつ器形，2）外反し，く字状を呈し，内部に稜をもつ口縁部，3）頸部（口縁部直下：現筆者注）もしくは頸部近くに貼付される口縁下突帯，4）だれたコ字形，もしくは三角形に近いもの，刻み目をもつもの，以上のバリエーションを含む胴部突帯，5）刷毛目調整の後，ナデをほどこす器面調整，である。KIVb式は，KIVa式と比較して，1）器形の丸みが強まり，2）口縁部がやや丸みを帯びるく字形となり，傾斜角（内傾度）が大きくなり，長大化する，とされる。

これらを，D6号甕棺の諸特徴と比較するならば，相互の共通性があきらかであろう。D6号甕棺器壁外面に，荒い刷毛目がナデ消されずにのこされるのは，立岩式期以来の，栗山遺跡を含む甘木・朝倉地域甕棺の地域性のあらわれと考えてよいし（橋口1982：168），その他の属性に関しては，相互の特徴がよく一致している。しかしながら，KIVa式，KIVb式のいずれの範疇に，D6号甕棺をおさめるべきかの決定には，困難がともなう。すなわち，a）口縁部形態をみるならば，丸みをおびつつ外反する点はKIVb式の特徴ではあるが，長大化の傾向はみとめられず，また，d）器形に関しても，丸みの強まりとはあくまで連続的な変化であり，統計的手法をもちいての個体群としての分離以外に，KIVa・KIVb式のいずれに所属させるかの決定の方法はない。

また，KIVa・KIVb式／桜馬場式期は，橋口氏自身も指摘するごとく，甕棺を用いる葬制の終焉期にあたる（橋口1979：160—161）。この時期には，甕棺葬が量的に激減するとともに，甕棺そのものも定型を徐々に喪失し，分類単位としての型式内部のバリエイションを増大させてゆく。（このことは，橋口氏によって型式認定のための「模式標本」としてあげられている甕棺間の個体差からも容易に読み取ることができる。橋口1979：158・159，Figures 111・112参照。）このような事実からも，橋口氏編年という一般性・汎用性を重視した編年体系内における，D6号甕棺の正確な位置付けの困難さがうかがわれる。ここでは，栗山遺跡から出土した，近接時期の甕棺諸個体との比較によって，D6号甕棺の，栗山遺跡内部における位置付けを行なうこととしよう。（しかし，KIVa・KIVb式／桜馬場式という位置付けの重要性が失われたわけではないことは，後の解釈の項であきらかとなる。）

KIVa・KIVb式／桜馬場式に先行するKIIIc式／立岩式新相の範疇に属する甕棺，また，D6号甕棺と同じく，KIVa・KIVb式／桜馬場式の範疇に属する甕棺は，栗山遺跡においてはC群墓域から出土している（図2）（佐々木1982）。いま，いわゆる大型棺について，これらを列挙するならば，52号甕棺，56号甕棺，59号甕棺，60号甕棺，62号甕棺，64号甕棺，65号甕棺，71号甕棺，73号甕棺，76号甕棺，そして77号甕棺がこれにあたる（図1・2）。また，これらに並行するいわゆる中型棺としては，54号甕棺，55号甕棺，そして66号甕棺があげられよう（図2）。なお，D群墓域における，D6号に先行する最後の埋葬は，4号甕棺，7号甕棺，9号甕棺，10号甕棺，そして12号甕棺という，KIIIa式（古相）／須玖式（古相）甕棺である（図1に，これらの代表として4号甕棺を示した）。

なかでも問題となるのは，D6号甕棺といくつかの形態的特徴を共有する52，56，64，65，71，77号甕棺である（図1：56号甕棺は77号甕棺とその特徴が類似するので図1中には77号甕棺のみ表示した。以下同じ）。52号・71号甕棺は，D6号甕棺同様，胴部器壁が特徴的にいったんすぼまり，ふたたび器径を増してゆく変換点に胴部突帯が貼付されるという特徴を有する。しかし，52号甕棺の場合，突帯位置は胴部中位よりやや上，また，71号甕棺の場合，突帯位置はほぼ胴部中位にあり，双方ともに，突帯貼付位置はD6号甕棺よりも若干高い。また，52号甕棺の口縁部は若干内傾しつつも「T」字形を呈する。71号甕棺の口縁部は「く」の字形を呈するが，D6号甕棺と比較すると，その内傾度は小さく，また，打ち欠かれてはいるが，「T」字形口縁を意識した小さな器壁内側への突出が，強いナデによって作り出されていた可能性がたかい。また，71号甕棺は，D6号甕棺と比較して，底部胴部界の屈曲が大きい。（以上は1995年7月の上述資料の実見の結果に基づく。以下の諸個体に関しても同じ。）以上から，胴部突帯の貼付位置付近の器壁の形状という特徴を共有する52号，71号，D6号甕棺は，52号→71号→D6号甕棺という時間的組列への整

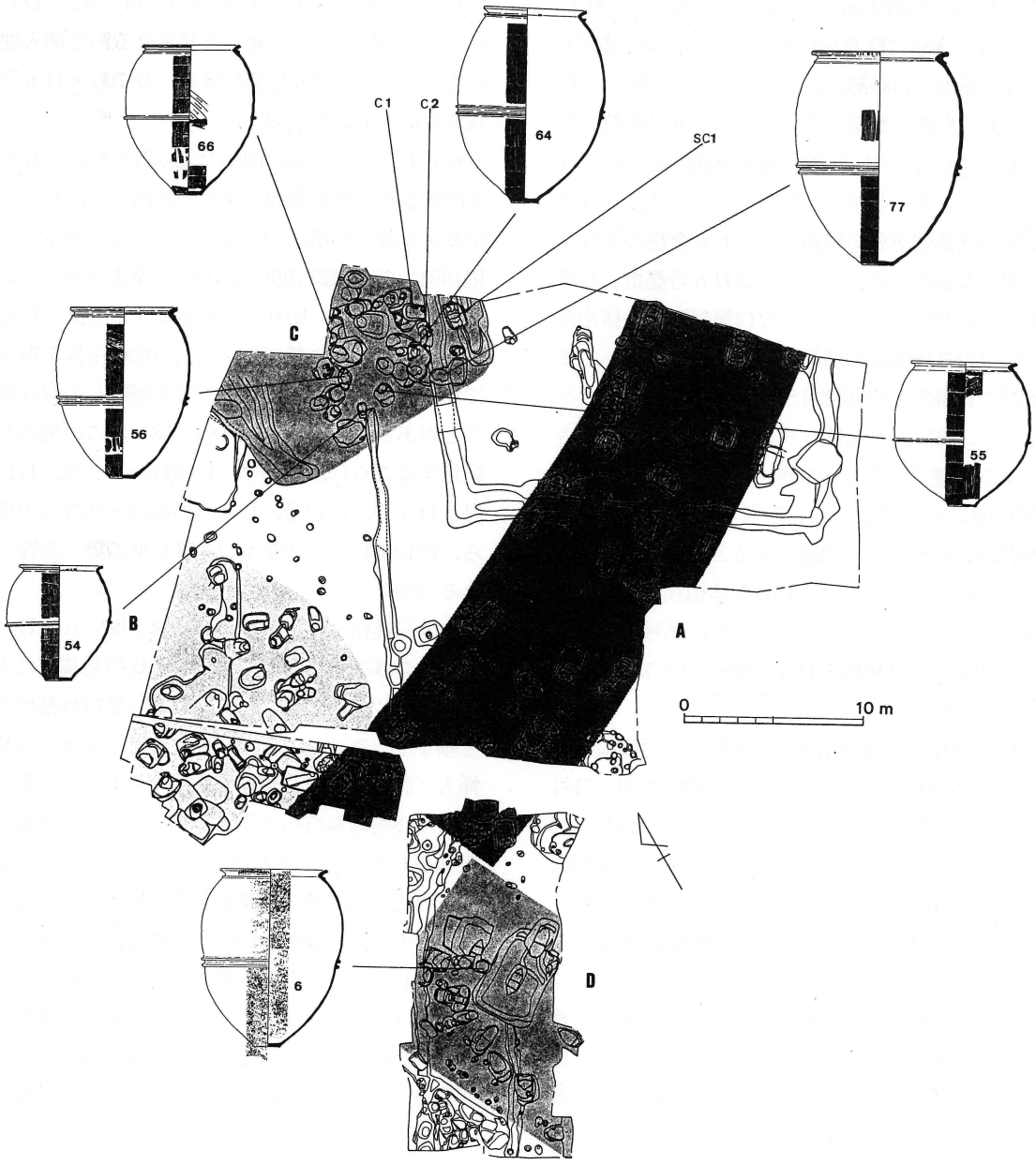

図2．栗山遺跡D群墓域第6号甕棺とその空間的位置付けのための資料．A—D：墓域名称，C1・2：1・2号石棺，SC1：1号石蓋土坑墓．C群墓域とD群墓域を隔てる距離に注意．(scale：配置図　1／400，甕棺　1／32)
(甕棺実測図：佐々木1982；松尾1994より，配置図：篠原1996より)

理が可能であることが明らかとなる（図１）。

56号・64号・65号・77号甕棺は，Ｄ６号甕棺同様，内傾度の大きい，外反する口縁部をもっている。65号甕棺口縁部の内傾度は，56号甕棺・77号甕棺・Ｄ６号甕棺のそれとほぼ同様であるが，器壁内面にしっかりした突出部を作り出しており，「Ｔ」字形口縁部を形成している。56号甕棺・64号甕棺・77号甕棺の口縁部は丸みを帯びつつ外反し，Ｄ６号甕棺口縁部の形態と類似する。しかし，56号甕棺・77号甕棺口縁部内面には，「Ｔ」字型口縁を意識した，面とりを有する突出が，小さいながら作り出されている。56号甕棺・77号甕棺の底部胴部界の屈曲は，Ｄ６号甕棺のそれよりもさらに弱くなっており，その点ではＤ６号甕棺より新しい様相を示すのだが，上述のような口縁部形態の様相からすると，相互の先後関係は微妙といわざるをえない。また，64号甕棺の口縁部の内傾度は56号・77号・Ｄ６号のそれよりも大きく，橋口氏のKIVb式の模式標本の一つとされた二塚山K76下甕の口縁部の形態に近いが（橋口1979：160），底部形態においては56号・77号・Ｄ６号と比較して，底部胴部界の屈曲がより明確であるという，若干古い様相を見せる。以上のように，これら個体相互の型式学的関係は複雑な様相を呈するが，少なくとも，65号甕棺→56号甕棺・64号甕棺・77号甕棺・Ｄ６号甕棺という時間的組列への整理は可能であろう（図１）。

ここで，64号甕棺・65号甕棺・71号甕棺・77号甕棺を相互に比較すると，71号と65号の新古関係は微妙だが，71号は，56号・64号・77号よりも古相を呈する。すなわち，71号甕棺は，口縁部形態では64号よりも古相であり，底部形態では77号より古相である。このことから，52号・65号・71号→56号・64号・77号・Ｄ６号という整理が可能となる。

以上から，Ｄ６号甕棺は，Ｃ群墓域56号・64号・77号甕棺とともに，型式編年の観点から，栗山墓地における，最も新しい大型甕棺の一つということになる（図１）。中型棺，また，これらに並行ないしは後出すると考えられる石棺墓・石蓋土坑墓を加えるならば，Ｃ群墓域の９基の埋葬遺構とともに，栗山遺跡における最後の埋葬の痕跡の一つということになる（図２）。付言するならば，Ｄ６号甕棺の埋葬行為は，Ｄ６号甕棺を仮にKIVa／KIVb式の過渡的個体と認定した場合，Ｄ群墓域においてこれに先行する最後の埋葬，すなわちKIIIa式／須玖式甕棺を棺として用いた埋葬の後，KIIIb式，KIIIc式，KIVa式の，都合三つの甕棺型式，また，KIVa式と認定した場合でも少なくとも二つの甕棺型式に対応する年月をへて，Ｄ群墓域において執行された埋葬行為ということになる（図１）。

II－２．空間的位置付け

Ｄ群墓域中央部には，第５号甕棺（以下Ｄ５号甕棺と略称，Ｄ群墓域のその他の甕棺に関して以下Ｄ○号甕棺と呼称する）のための，5.2m×3.35mに及ぶ巨大な墓坑がよこたわっている（図３）（松尾1994：14―16）。Ｄ６号甕棺墓は，この墓坑へと，主軸を直交させる形で挿入埋置されている。さらに，Ｄ６号甕棺墓は，Ｄ７号・Ｄ８号甕棺墓の墓坑を切っている（図３）。

報告者は，土層図の細かな読み取りや，これを取り巻いて配置された甕棺墓葬の削平の状況から，かつてＤ５号甕棺墓坑を覆う「墳丘」が存在したことを推定している（松尾1994：65；篠原1996：83･85）。筆者はかつて，成人用埋葬主体墓坑へと，切り込まれるように埋置される乳幼児用甕棺の配列状況に基づき，成人用埋葬主体を覆う，略矩型で埋葬主体より若干大きめの「土饅頭」の存在を推定したことがある（溝口1995a：180―181）。この視点をここでも応用するならば，Ｄ18号，Ｄ10号，Ｄ９号，Ｄ11号，Ｄ３号，Ｄ４号，Ｄ12号，Ｄ２号の配置・墓坑への挿入方向から，約10m程の二辺をもつ，略矩型の墳丘の存在が想定できる（図３）。

Ｄ６号甕棺にその墓坑の西南隅を切られるＤ８号甕棺墓は，Ｄ群墓域中において，Ｄ５号甕棺墓墓坑に次ぐ墓坑規模を有し（2.60m×2.00m），Ｄ５号甕棺墓墓坑主軸とその主軸を平行させている（図３）。また，墓坑への甕棺棺体の挿入／設置方向も，Ｄ５号と同一であったであろうことは，Ｄ５号甕棺墓墓坑へと下るためのステップ状施設が，墓坑東南隅にしつらえられていることからもうかがえる（図３）。すなわち，Ｄ５号甕棺墓墓坑底へ下ることを許された個人，もしくは諸個人の身体運動は，このステップ状施設の存在によって，墓坑東側から西側への動きへと，避け難くコントロールされていたと考えざるを得ないのである（図３）。加えて，Ｄ８号甕棺墓墓坑に付加されたステップ状施設は，埋葬儀礼に際して，許された人物が墓坑底へと下る際に踏みしめたものと考えられるが，その際の人物の動き，その人物の視線は，Ｄ５号甕棺墓墓坑の方向へと，避け難く向けられることとなる（図３）（このような，墓地建造環境による，埋葬儀礼参列者の身体経験のコントロールの意味に関しては　溝口1996　を参照）。このように，Ｄ８号甕棺墓の埋葬儀礼に際して，さまざまな技法を用いて，Ｄ５号甕棺墓の被葬者とＤ８号甕棺墓の被葬者とのあいだに，特別な社会的つながりの存在がシンボリックに表示されたことが推察されるのである（溝口1995b：86―88）。

このようなＤ８号甕棺墓墓坑を切りつつ，Ｄ５号甕棺墓墓坑へと直交するような形に挿入埋置されたＤ７号甕棺は，Ｄ６号甕棺墓の埋葬に先立つ，Ｄ群墓域最後の埋葬の一つである。これをさらに切る形で，Ｄ６号甕棺は埋置される

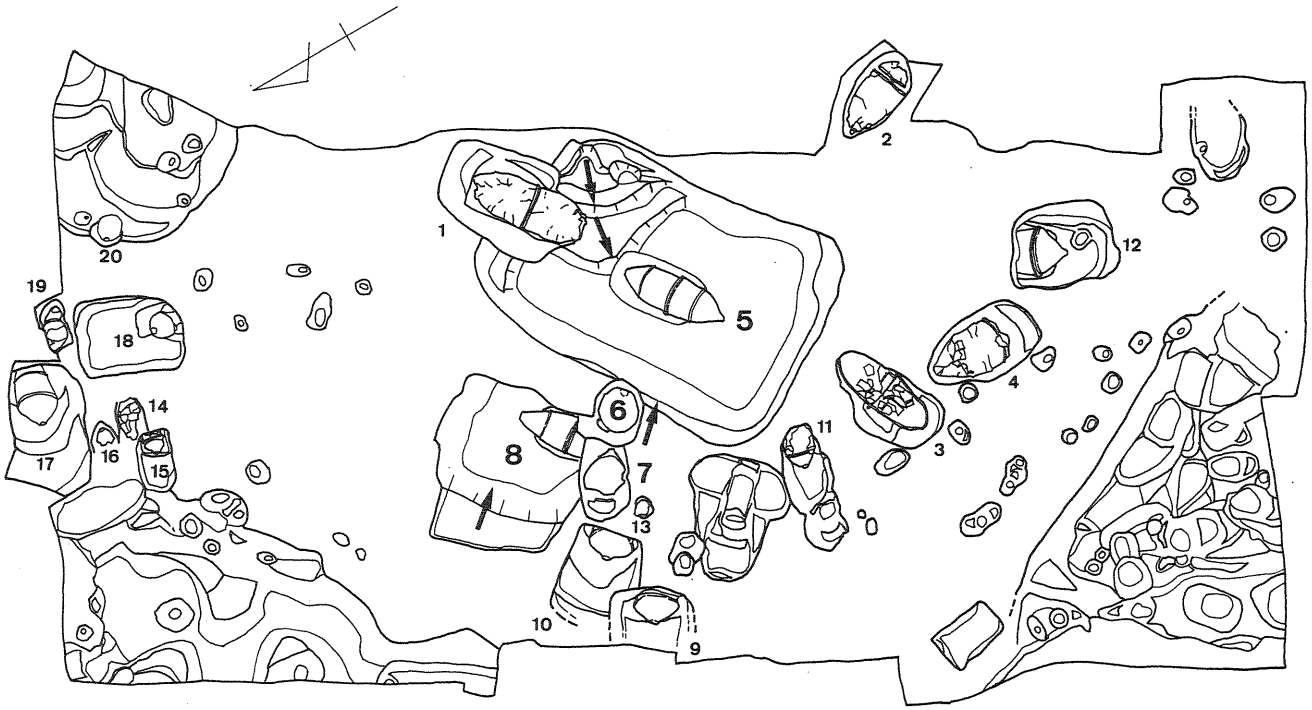

図3．栗山遺跡D群墓域．矢印：各甕棺葬にとなう埋葬行為参列者の身体運動・視線の方向．5・6・7・8号甕棺の相互の位置関係，想定される埋葬行為参列者の身体運動・視線の方向に注意．（scale：1／120）（松尾1994より抽出・再トレース，一部改変）

のである（図3）。

D6号甕棺墓が，D5号甕棺墓墓坑の南側，西側，東側にではなく（そこへの埋葬は当然可能であった），D5号甕棺墓北側の，D8号甕棺墓・D7号甕棺墓と重複する場所にあえて配置されたことの背後に，D6号甕棺墓埋葬の儀礼執行に携わった個人，ないしは諸個人の意図，すなわち特定のメッセージの発信の意図の存在を想定することは，以上の分析をへて，ごく自然なことと納得されよう（溝口1995b：86—88；1996）。

また，この段階に，栗山墓地のなかで，墓域としての利用が続いていた可能性があるのは，D群墓域と同じく，KIIIa式／須玖式段階に墓域としての役割をほぼ終えたA群墓域をこえて約30mはなれたC群墓域のみであることを，ここでいま一度確認しておきたい（図1・2）。

Ⅲ．栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓の意味：その解釈

以上，栗山遺跡内におけるD6号甕棺墓の時間的・空間的位置の検討は，X）D6号甕棺墓は，D群墓域における先行する最後の墓葬から，橋口氏設定の甕棺型式二ないし三型式分という長い年月の経過ののちに，かつて墓域であったところのD群墓域に営まれた墓葬であり，栗山墓地全体でも，墓地としてのこの場所の利用の終焉を示す甕棺墓葬の一つであること（図1・2），また，Y）D6号甕棺墓が，D群墓域の中心的墓葬たるD5号甕棺墓，また，D5号甕棺墓の被葬者との密接な社会的関連がその埋葬儀礼を通じて表示されたと推察されるD8号甕棺墓・D7号甕棺墓と近接／重複する位置に，ある意図をこめて配置されたこと（図3），以上の二点を明らかにした。

これらの知見に基づきつつ，D6号甕棺墓をその物質的痕跡として遺した葬送儀礼と，それを通じて発信された社会的メッセージの内容，その意味についての考察をおこなうためには，a）D6号甕棺墓被葬者の埋葬儀礼において動員された主要な象徴的資源（symbolic resources）の内容と，その担った／担わされた意味の検討，そして，b）そのような資源の動員に基づくメッセージの発信を必要／必然とした社会環境の検討がそれぞれ必要である。

まず，a）に関する検討から始めよう。D6号甕棺墓の位置の検討の項で明らかにしたとおり，この墓葬が，D5号・D8号・D7号甕棺墓への近接／重複を意図して，その位置へと配置されたことは，先の検討結果からも確からしい（図3）。そして，ここでは，D6号甕棺墓が，D8号・D7号甕棺墓墓坑を切りつつ，D5号甕棺墓墓坑へと挿入されるが如く埋置されている事実が，問題解決のための大きなヒントとなる。すなわち，D6号甕棺墓被葬者の埋葬

儀礼に参列した人々が，D6号甕棺の墓坑への設置と，遺骸の棺体内への挿入を見守るとき，その視線は，D5号甕棺墓の被葬者が眠る場所へと避け難く注がれるようにしむけられていたことは，先に示唆した通りである(図3)。加えて，埋葬儀礼参加者らは，その足下に，やはりD5号甕棺墓を意識して配置されたD8号・D7号甕棺墓（の被葬者）を踏みしめなければならなかったのである（図3)。

これらを考慮するならば，D6号甕棺墓の被葬者の埋葬儀礼において動員された象徴的諸資源の内に，D5号甕棺墓の被葬者のイメージ，D8・D7号甕棺墓の被葬者のイメージが含まれていなかったと想定することの方が難しかろう。むしろ，D6号甕棺の被葬者の記憶・イメージとともに，D5号・D8号・D7号甕棺墓に葬られた，個々の「特定祖霊」(溝口1995b：86･92）にまつわる社会的記憶・イメージを動員することによって，ある特異な社会的メッセージを発信することを目的として，D6号甕棺の埋葬位置が決定されたと推察することが，自然なのではなかろうか。しかも，これら「特定祖霊」としての個々人の死後，D6号甕棺の埋葬儀礼の執行までに，橋口氏甕棺型式にして二―三型式分の時間（あるいは100年を前後するか？）が経過していることに，重ねて注目しておきたい。

それでは，D6号甕棺の埋葬行為を通じて発信された社会的メッセージの内容とは，いかなるものだったのであろうか？このことを考察するためには，上述b)，すなわち，D6号甕棺墓葬が営まれた時代の社会の様相が明らかにされねばならない。

KIVa／KIVb式／桜馬場式期とは，弥生時代後期初頭／前半，弥生Ⅳ期からⅤ期の前半に相当する[2]。この時期を前後して，北部九州の考古資料一般に，大きな変化が現れる。すなわち，1）北部九州地域における成人用大型甕棺を用いた葬制は，KIVa／KIVb式／桜馬場式期から，おそくともKIVc式／三津式期までに，その終焉をむかえる。(福岡平野周辺においては，成人用大型甕棺墓制の終焉現象は，一足早くKIIIc式／立岩式期後半に起きる。）(橋口1979：160―161) 2）このような，成人用大型甕棺墓制の終焉と呼応するかのように，栗山墓地を含む，多くの墓地がこの時期をもって廃絶する。(成人用大型甕棺墓制の場合と同様，福岡平野周辺ではこの現象は一足早くKIIIc式／立岩式期後半に起きる。)また，少数ではあるが，この時期に新たに出現する墓地も存在する。しかし，墓地遺跡そのものの総数がこの時期を境に激減していることはうたがえない。3）三雲遺跡群，比恵・那珂遺跡群などの，平野単位における最大規模の集落遺跡を除き(橋口1987)，この時期に廃絶する中・小遺跡が多い。4）この時期の後半，もしくはその直後に，高杯・長頸壺などを中心とする瀬戸内地方の土器の，北部九州地方土器様式への侵入が始まる(岩永1989)。

2)・3）に関しては，そのような現象そのものの実態のより詳細な記述・分析の作業が将来必要となってこよう。1）のような現象については，4）と関連づけつつ，岩永氏が行なわれた分析と解釈がある(岩永1989)。その内容は詳細かつ多岐に及び，ここでその全容を紹介することは不可能であるが，岩永氏は，文化要素の一単元として土器を捉える立場から，1)・4)という現象の連動の要因を，「在来文化伝統が保持できなくなった」ことによるものとする解釈を下されている（同上：93)。

いずれにせよ，考古資料の諸単元におこった以上のような連動的変化は，考古資料に読み取れる，弥生時代中期初頭／弥生II期以来の発展・集約化の方向性の「断絶」として理解されるべきものである。

考古学的諸情報に見るこの「断絶」の，実態的社会現象への翻訳の試みはひとまずおき，これを，D6号甕棺の埋葬儀礼において発信されたと推察されるメッセージと対比するならば，興味深い対立／照応関係が浮かび上がる。すなわち，ここで，橋口氏甕棺型式二―三型式という時間幅をこえて「特定祖霊」にまつわる記憶・イメージを想起・動員しつつ発信されたメッセージとは，過去（D5号・D8・D7号甕棺埋葬時）と現在（D6号甕棺埋葬時）とをつなぐ実在しない「連続性」を，D6号甕棺被葬者とD5号甕棺・D8号・D7号甕棺被葬者とのあいだに観念的に仮構するものであったと想定できないだろうか。もし，このような推察が妥当なものとして容認されるならば，上述の，考古資料総体を色濃く覆う「断絶」と，この「仮構」された「連続性」とのあいだには，なんらかの相互的関連性の存在が想定されざるをえないのである。

以上の考察結果を念頭におきつつ，より実態的な推察(inference)の領域に踏み込むことにしよう。(以下の推察については，田中良之氏との日常的討論に依るところが大きいことを明記する。）上の1）―4）の現象を集団関係・親族システムの変化というフィルターを通じて解釈するならば，そこには，集落の断絶，墓地の断絶に表象されるような居住集団の断絶，移住，統合，また，それを引き起こした，もしくは，それによってひきおこされた集団関係・親族システムの変容が読み取れるであろう。田中良之氏による，弥生・古墳時代親族システムの変容に関する諸研究の成果によるならば（例えば　田中1991；田中・土肥1988参照)，この時期の社会的諸関係の実態的単位は，基本的に，いまだ血縁に基づくものであったと考えられる。いま仮にそのようなものの最小単位としてリネージ(lineage)を想定するならば，集落の廃絶，墓地の廃絶とあらたな墓地の出現は，リネージ間関係の再編成，すなわちリネージの廃絶・統合・系列的関係再編の表象として理解すること

が可能である。そして，リネージ統合の主要な手段の一つとして，系譜的位置関係によってえらばれたリネージ首長／リネージ群首長による「祖先」祭祀の執行があることは，広く認められるところである（Friedman and Rowlands 1977: 206-216）。

いま，ここで，D6号甕棺墓被葬者に対する埋葬儀礼の執行の主体に関して，実態的単位の措定を行なうことはできない。おそらくは，田中氏が示された方法・方向での研究が今後積み重ねられることによって，この問題に関する実証的解決の糸口がつかめるであろう。しかし，ここでは，とりあえず，以下のことが確認できればよい。すなわち，KIVa／KIVb式／桜馬場式期は，社会集団間の関係が，断絶・移住・再系列化などの形で揺らぎ，再編成された時期であった。個々の社会集団が，様々な物財・人の交換，また，相互的社会的義務などによって統合されていたとすれば，このゆらぎは，そのような統合のネットワークの「存続／連続性」のゆらぎとして，人々に意識されたことであろう。このような状況のもとで，葬送儀礼において，数世代をさかのぼる祖先，いまや確実に「祖霊化」した個別祖先にまつわるイメージ・記憶を想起・動員しつつ発信されたメッセージは，時を超えた連続性を，当時の社会的諸関係の象徴としての死者＝D6号甕棺被葬者と，過去の社会的諸関係の象徴としての祖霊＝D5号・D8号甕棺被葬者とのあいだに仮構することを意図するものであり，そのメッセージは，ゆらぎつつある社会秩序の「連続性」と，「連続性」を支えてきた集団間の系列的関係の再構築・正当化を指向するものではなかったか。

D6号甕棺墓がそれに対して挿入されたところのD5号・D8号甕棺墓の被葬者は，それらが墳丘の中心的位置を与えられたことに示されるように，それらに対する埋葬儀礼が執行された当時から，集団の「祖（founding ancestors）」としての位置付けを与えられていたことが想定される（図3）。（D5号甕棺墓の被葬者について，「開発始祖」という表現を聞いたことがあるが，アイデアの先取権のありかをつきとめることができていない。）このことを考えあわせるならば，以上の推察はより説得的ものとなるであろう。

Ⅳ．結　論

以上，栗山遺跡D群墓域第6号甕棺の意味するところについて，若干の考察をおこなってきた。この甕棺墓葬を，葬送という社会的行為の物質的痕跡として捉え，そのような社会的行為を通じて発信されたメッセージの内容と，その社会的意味の探究を目指して行なわれた以上の分析作業は，1）栗山遺跡D群墓域第6号甕棺の埋葬儀礼を通じて発信されたメッセージは，本甕棺墓の被葬者と，その埋葬をさかのぼること甕棺型式にして二から三型式前に埋葬された第5号甕棺・第8号甕棺の被葬者とのあいだに，ある種の「連続性」の存在を「仮構」することを指向するものであったこと，2）考古学的情報から推察される，栗山遺跡D群墓域第6号甕棺埋葬の時期の一般的社会状況からして，この「連続性」の仮構は，この埋葬行為を執行する諸個人・集団が，集団の「祖」としての「特定祖霊」＝第5号・第8号甕棺墓被葬者にまつわる記憶・イメージを喚起・動員することによって，動揺する集団間関係の再統合・再系列化をイデオロギー的に図ろうとしたものと推察されること，以上の二点をあきらかにした。

それでは，このような，「個別祖霊」に関する社会的記憶のイデオロギー的操作に基づく社会秩序の再構築・正当化の企ては，成功したのであろうか？この問に対して，直接的な解答を行なうすべはない。しかしながら，先に列挙したような，墓制以外の考古資料の諸単元にあらわれる「断絶」現象，それが示唆する集団間関係の混乱，そして，なによりも，栗山墓地の経営そのものが，このような企ての物質的痕跡としてのD6号甕棺の埋葬をもって終焉を迎えていることを考えあわせるならば，その答えは「否」に傾かざるを得ないのではないか。

以上の考察は，栗山遺跡という一遺跡のみを対象とした考察であり，上に述べたような推論・解釈の説得性を増すためには，同様な事例の存在の指摘を積み重ねてゆかねばならない。しかしながら，すでに，佐賀県鳥栖市柚比本村遺跡でも，ほぼ同様な現象が認められることを，筆者は確認している（渋谷1994に記述される事実報告の検討の結果による）。さらなる事例の蓄積をまって，再度本格的な検討を行ないたいと考えている。

ともあれ，以上のささやかな論考が，葬送という社会的行為を通じた社会戦略の遂行の様態の分析に基づく歴史叙述の一例として認められるとすれば，筆者の目指すところは達せられたといえよう[3)]。

註

1）小論では弥生時代前期末，中期初頭，中期前半，中期中頃，中期後半，後期初頭，後期前半という呼称と弥生Ⅰ—Ⅴ期という呼称を並記するが，後者は小田・佐原両氏による土器様式編年に基づく弥生時代時期呼称システムに依拠するものである（小田・佐原1979）。北部九州弥生土器様式編年によるならば大略弥生時代前期末＝弥生Ⅰ期末＝板付IIb(c)式，中期初頭＝弥生II期＝城ノ越式，中期前半＝弥生III期前半＝須玖Ⅰ式，中期後半＝弥生III期後半＝須玖II式，後期初頭＝弥生Ⅳ期＝高三瀦式，後期前半＝弥生Ⅴ期前半＝下大隈式という枠組みとなる。近年北部九州弥生III期後半と近畿地方弥生Ⅳ期の時間的重複を長く見積もる見解が主流を占めつつある。

このような見解からすれば，本稿の弥生Ⅳ期は近畿地方弥生Ⅳ期とⅤ期にまたがるものであろう。また，北部九州弥生時代後期土器様式編年と様式呼称体系との接合にはさらなる整理が必要と考えられるが，ここでは，橋口氏KIVa・KIVb式甕棺を桜馬場式と呼称するならば，これらは弥生Ⅳ期・Ⅴ期前半の一部＝高三瀦・下大隈式の一部にまたがり，橋口氏KIVc式甕棺を三津式と呼称するならば，これは弥生Ⅴ期前半＝下大隈式と対応すると考えておきたい。

2）註1参照

3）田中良之・岩永省三・澤下孝信・杉村孝一・松永幸男・堤研二の諸氏には，本稿の内容の発想の源泉となる多くの示唆・ご教示を日常的にいただいている。松尾宏・篠原浩之の両氏には，栗山遺跡出土甕棺の度重なる実見のお願いのたびに，さまざまな便宜をお計らいいただいている。ここにあつく感謝し申し上げたい。

本稿の執筆においては，田中良之氏との日常的討論，また，岩永省三氏から常日頃ご教示いただいている北部九州弥生時代総体のイメージに，大きな示唆を得ていることを殊に明記し，感謝し申し上げたい。

短時日にて脱稿したこの論文が含むにちがいない多くの誤りは，ひとえに筆者一人の責任に帰するものであることはいうまでもない。

なお，本研究は平成8年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）課題番号08710268による研究成果の一部である。

参照文献

Barrett, J.C. 1988. The living, the dead and the ancestors: Neolithic and Early Bronze Age mortuary practices. In *The archaeology of context in the Neolithic and Bronze Age: recent trends*, pp. 30-41 (eds. J.C. Barrett and I. Kinnes). Sheffield: Sheffield University Press.

Friedman, J. and Rowlands, M. 1977. Notes towards an epigenetic model of the evolution of civilisation. In *The evolution of social systems*, pp.201-76 (eds. J. Friedman and M. Rowlands). London: Duckworth.

春成秀爾。1984。「弥生時代九州の居住規定」『国立歴史民俗博物館研究報告』，第3集：1—40頁。

橋口達也。1979。「甕棺の編年的研究」。『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』，第31集中巻，94—101頁（橋口達也編）。福岡：福岡県教育委員会。

橋口達也。1982。「甘木・朝倉地方甕棺についての若干の所見：とくに栗山遺跡出土甕棺を中心として」。『栗山遺跡：福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡の調査（甘木市文化財調査報告第12集）』，167—170頁（佐々木隆彦編）。甘木：甘木市教育委員会。

橋口達也。1987。「聚落立地の変遷と土地開発」。『東アジアの考古と歴史：岡崎敬先生退官記念論文集』，中巻，703—754頁（岡崎敬先生退官記念事業会編）。京都：同朋社。

岩永省三。1989。「土器から見た弥生時代社会の動態：北部九州地方の後期を中心として」。『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ：生産と流通の考古学』，43—105頁（横山浩一先生退官記念事業会編）。福岡：横山浩一先生退官記念事業会。

松尾宏編。1994。『栗山遺跡Ⅱ：福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡の調査（甘木市文化財調査報告書第28集）』。甘木市：甘木市教育委員会。

Metcalf, P. and Huntington, R. 1991. *Celebrations of death: The anthropology of mortuary ritual* (2nd edn.). Cambridge: Cambridge University Press.

Mizoguchi, K. 1993. Time in the reproduction of mortuary practices. *World Archaeology*, Vol. 25-2: 223-235.

溝口孝司。1993a。「「記憶」と「時間」：その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割り」。『九州文化史研究所紀要』，第38号：21—59頁。

溝口孝司。1993b。「ブリテン島青銅器時代における火葬習俗導入の社会的意義：「意味」の考古学から「社会的行為」の考古学へ」。『古文化談叢』，第30集(下)：1261—1276頁。

溝口孝司。1995a。「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究：いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討」『古文化談叢』，第34集：159—192頁。

溝口孝司。1995b。「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究：北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的検討」。『日本考古学』，第2号：69—94頁。

溝口孝司。1996。「二列埋葬墓地の終焉」（第99回古文化研究会発表，投稿中）。

森貞次郎。1968。「弥生時代における細形銅剣の流入について：細形銅剣の編年的考察」。『日本民族と南方文化』，127—161頁（金関丈夫博士古稀記念委員会編）。東京：平凡社。

中園聡。1991。墳墓にあらわれた意味：とくに弥生時代中期後半の甕棺墓にみる階層性について」。『古文化談叢』，第25集：51—92頁。

小田富士雄・佐原真。1979。「瀬戸内をめぐる九州と機内の弥生土器の検討」。『高地性集落の研究：資料編』，17—26頁（小野忠熙編）。東京：学生社。

佐々木隆彦編。1982。『栗山遺跡：福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡の調査（甘木市文化財調査報告第12集）』。甘木市：甘木市教育委員会。

渋谷格。1994。「鳥栖市柚比本村遺跡の調査」。『九州考古学』，第69号：67—86頁。

篠原浩之編。1996。『甘木市内遺跡群　栗山遺跡Ⅲ・平塚垣添遺跡：福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡群の調査（甘木市文化財調査報告書第37集）』。甘木市：甘木市教育委員会。

田中良之。1991。「弥生時代の親族構造」。『新版古代の日本』，4巻，101—102頁。東京：角川書店。

田中良之・土肥直美。1988。「二列埋葬墓の婚後居住規定」。『日本民族・文化の生成：永井昌文教授退官記念論文集(1)』。東京：六興出版。

（1996年9月30日受付；1996年12月1日受理）